

も いずみ ゆう  
茂 泉 優

学位の種類 博士（教育情報学）

学記番号 教情博 第 39 号

学位授与年月日 平成 30 年 3 月 27 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育情報学教育部（博士課程後期 3 年の課程）  
教育情報学専攻

学位論文題目 能動的な学びに向けた授業改善に関する研究

論文審査委員 (主査)  
准教授 中 島 平 准教授 佐 藤 克 美  
助 教 尹 得 霞  
教 授 北 村 勝 朗  
(日本大学)

## 〈論文内容の要旨〉

本論文は、学校教育で行われている授業改善を、学習者の能動的な学びの視点から明らかにすることにより、生徒の主体的な学びの実現に向けた学びの環境構築として位置づけ、学校教育現場での実践に向けた体系化を企図した研究である。そのために本研究では、これまで多様な議論がなされている学力について整理しつつ、学習者が主体的に学習に取り組む態度を協同学習の理論的枠組みの中で論じた上で、学校教育現場での実践研究それぞれに理論的基盤を位置づけ、実践化する際の要素として体系化を試みている。

本論文は、5章によって構成されている。まず序章において時代背景の変化に伴って変遷する、学校教育において育成が目指される資質・能力を学力との関わりの中で整理している。その中で学力の3つの要素の一つである「主体的に学習に取り組む態度」に着目し、学校教育現場における教科学習上の現状や課題について詳述している。また、その課題の解決を視野に入れつつ、先行研究を通観した上で、本研究における用語および理論的

枠組みを示し、協同学習および学習態度、向上を目指す授業について検討する本研究の意義について論じている。第2章では、協同学習の今日的意義および実践について体系的に論じている。そこでは、協同学習の要件としての「課題設定」「適切な運営」「学習者理解」を示した上で、それぞれについて実践的背景を含め検討を行うと同時に相互関連を構造化し、協同学習のモデルを提示している。第3章では、協同学習が学習者の学習態度に与える要素と構造について論じている。そこでは、第2章で得られた知見に基づく協同学習の実践により、学習者の学習態度に与える要素と構造を明らかにし、能動的な学びに向けたモデルを提示している。第4章では、第2章および第3章の知見に基づく協同学習の実践を通し、学習態度の向上と主体的な学びの具体性について論じている。以上の分析をふまえ、第5章において、能動的な学びに向けた授業改善について考察が加えられ、次の3点を導いている。第1に、学習指導の理論として導入した協同学習に関し、課題設定に応じた運営方法による学習環境整備により学習者主体の学びが実現されることで協同学習が深まる点を確認している。第2に、学習態度は、協同学習を通して自己を客観視しながらこれまでの学習を批判的に評価するという一連の流れを繰り返すことで向上することを示している。第3に、ルール意識および拡散的思考を促す課題設定が協同学習の中での他者理解を促進し、学習者の主体的な学びに影響を及ぼす点が示されている。

こうした分析から、学校教育の中で行われる授業改善について、協同学習を通じた学習態度の向上という観点から、能動的な学びを教科学習の中に位置づけることにより体系化している。

## 〈 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 〉

本論文は、後期中等教育における数学科の学習態度の課題に焦点を当て、主体的な取り組みを促す協同的な学習の展開を実際の授業において実施しつつ考究する実践研究から構成されている。現在、学校教育現場における授業改善の目標の一つとして位置づけられている主体的に学習に取り組む態度に関する研究は、学習態度の概念が広範囲な意味をもつが故に議論が多岐に渡っており、その定義づけや学術的研究の蓄積は不十分であり、また実践においても模索状態が続いている。そうした問題状況の中で、本論文は、学習者の能動的な学びの意味を問い直すことで、学校教育における学習態度に関する教育的取り組みに理論的基盤を位置づけると同時に、協同学習を通じた教育実践の中で学習態度に関する要素と構造を論じ、体系化を行った。それにより、これまで様々な課題を内包したまま展開されていた学校教育現場での学習態度の問題に対し、能動的な学びの観点から検討し、新たな提言を行っている。

審査の結果、以下の点が指摘できる。

第1に、学校教育における授業改善を、学習者の主体的な学びに取り組む態度の視点から検討し体系化するという本論文の視点は独創的であり、先駆的研究として評価できる。学校教育現場における学習態度に関しては議論や定義づけが十分になされておらず、研究の蓄積

も少ない現状の中で、実際の授業実践による具体的な事例に基づき実証的に論じた点は、教授技術の視点に止まらない授業改善の必要性を明確にしたものとして意義がある。

第2に、能動的な学びの問題を単に理論的に考究するのではなく、実際の学校教育における実践を事例として取り上げ、考察対象として論じていることが評価できる。それにより、学習者による学び合いの体験の詳細について深く分析が行われており、今後、学校教育現場における実践に対し大きな寄与が期待できる重要な提案が行われた点で評価される。

第3に、学習者の主体的に取り組む態度を協同学習との関連性の中で論じ、具体的な事例に基づく学術的な考究を行っている点が評価される。協同学習を授業における学習環境整備の手法として取り入れ展開することにより学習者主体の学びが実現される点を実証的に論じた点は今後の授業改善の取り組みにおける新たな視点を提示したものとして意義がある。本論文の成果は、学校教育現場における主体的に学習に取り組む態度について、その教育的意味を検討する上で一つの視座を占めるものとして評価される。

他方、本論文はいくつかの課題を残している。

第1に、主体的に学習に取り組む態度を協同学習による授業展開の中で捉え体系化している点で評価されるが、それを多様性に富んだ学校教育現場でどの様に具体的に展開していくか、展開した上でどの様な効果と課題が表れるのかについて、十分に示されてはいない。今後、より具体的かつ詳細な学校教育現場の実践において考究することが求められる。

第2に、本研究では高等学校における授業場面を対象として考察を行っているが、より多様な校種を対象とした授業改善方策や様々な教科指導における主体的に学習に取り組む態度のあり方についての議論は不十分である。かなり入念に理論的根拠を読み問いた上で実践を位置づけ緻密な分析がなされているものの、今後、更に多様な事例の考察を蓄積することによって、より精緻なモデルが構築されることを期待したい。

第3に、本研究で構築されたモデルの普遍的妥当性の問題である。本論文で示された学習者の主体的な学びに関する知見が、教科教育以外の場面や、多様な習熟過程にある学習者に対してどこまで普遍的な妥当性をもつものか、今後、多角的に検討することが重要な課題として残されている。

しかし、本論文を全体としてみれば、学校教育において育成が目指される資質・能力を学力との関わりの中で丁寧にまとめ、その上で、協同学習の理論的枠組みに基づいた授業実践を対象として緻密な分析を重ね、学習者が主体的に学ぶ態度の視点からの授業改善の必要性と方向性を理論的に提言すると言う本論文のねらいは成功していると判断できる。

よって博士(教育情報学)の学位論文として合格と認める。